

## 謹 弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

藤 井 正 隆 氏 長門市医師会 8 月 6 日 享年 80

## 編 集 後 記

久しぶりに動物園に行ってみた。類人猿のオランウータンを見ているうちに、ヒト以外の霊長類には白目が無いことを思い出した。

目は急所で本来隠したい部分であり、ヒト以外の霊長類は体毛や肌の色に近い目の色をして目をカモフラージュしている。一方ヒトは、目の場所が直ぐに分かり、どちらを向いているかも明らかで次の行動が敵に読まれてしまう白目を持っている。

認知科学者の小林洋美氏によると、ヒトは着色していない白い強膜があり、ヒト以外の霊長類は、角膜縁の角膜上皮、結膜上皮、強膜に茶色素がある。ヒトの強膜色は虹彩色・皮膚色と明らかに異なるため、眼裂と虹彩の位置が強調され、霊長類で唯一視線を強調する色彩パターンを持っている。また、強膜が大きく露出し、かつ非常に横長な眼裂となることにより水平方向の視野拡大能力が増大できるようになった。すなわち、ヒトの目の進化のシナリオとしては、強膜露出度と横長度が霊長類中最大となったのは、ヒトが森から出て完全な地上性生活者となり、大型化するにつれて、眼球運動による視野拡大（特に水平方向）の必要性に適応した結果である。さらに視線を強調する色彩パターンの目を持つに至ったのは、小集団での狩猟・採取という共同作業のために同種他個体との互恵的協調行動の必要性が高まったためであるとされている。

確かに、目の能力は確実に進化しており、「目は口ほどにものを言う」（英訳では“The eyes are as eloquent as the tongue”と、もの言うどころか雄弁と置き換えられている）という諺を生み出すまでになった。

確実に進化してきたとは言え、大上段に（戦略的）互恵関係を持ち出さなければ共同作業すらできない現代社会の姿に不満はあるが、これ以上の進化による行く末を案ずる説は多く、現状の絶妙なバランスに満足した方がよさそうでもある。

ともかく、動物園帰りは「あかちゃんはやっぱりみんなかわいいね」に限る！

（常任理事 今村 孝子）